心のバリアフリーを目指して

任期：2003.12~2005.12

平井 麗子
青年海外協力隊 / 青少年活動
（社会福祉局）

みなさんは、スペシャルオリンピックス（以下SO）をご存知ですか？
- 知的発達障害のある人々の自立と社会参加を目指し、日常的なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供している国際的なスポーツ組織 - 2月に長野で行われた冬季世界大会が記憶に新しい方もいらっしゃるでしょう。ここマレーシアでも1999年にSOが設立され、その活動は少しずつ、しかし確実に広がりつつあります。

ペラ州はテロ・インタン。この小さな田舎町に、私の配属先である「ベタニーホーム」があります。ベタニーホームは、障害者の自立支援を目的として1988年に設立されたNGOで、スクールプログラム、職業訓練など様々なプログラムを提供しており、現在約170人の障害児 / 者が利用しています。ここで私はおもに、スポーツ・レクリエーションの紹介および指導、各種イベントの企画・運営に取り組んでいます。障害者への指導や福祉分野での活動経験がほとんどないまま、不安を抱いての赴任でしたが、「スポーツを楽しむことに、障害者、健常者の壁はない」という気持ちが強くあったので、"福祉の枠にあまりとらわれず、自由な発想で自分らしい活動を"をモットーに、子どもたちと走り回り、汗を流す日々を送っています。

活動を行う中で感じたのは、子どもたちは驚くほどたくさんの可能性を秘めているということです。しかしながら、その可能性を活かせる場が少ないこと、また可能性を見出せずにいるケースが非常に多いというのが残念な現状でした。障害者が地域社会の中に参加し、活動する場を見つけようとしたとき、スポーツやレクリエーションは大きな役割を果たします。私たちは、そのような"場"や、彼らの可能性や興味を引き出す"選択肢"の提供をできるだけ多く、多種多様な形で行っていく必要があるでしょう。ベタニーホームにおけるSOへの取り組みには、このような背景がありました。

今年5月、ベタニーホームが中心となって、テロ・インタンで初めてとなるSOを開催しました。その開催に大きく貢献してくれたのは、他でもない地域のボランティアでした。グラウンド整備を手伝ってくれた学生、当日飲み物を提供してくれたお店の人々、審判をしてくれた地元学校の先生 ....。その形は様々ですが、どれもなくてはならないサポートです。SOでは、スポーツ活動に参加する障害者のことを「アスリート」と呼びます。彼らアスリートは、スポーツをとおして身体的にも精神的にも少しずつ成長していきますが、それと同様に、関わったボランティアにも何らかの変化があるようです。「彼らに関わると優しい気持ちになれる。勇気がわく。」—ある学生ボランティアがこう話してくれました。障害者に触れることで、彼らの存在を知ることで、ボランティアが何かを感じることは、（たとえその感情が肯定的なものではなくても、）とても重要です。ですから、SOはただ単に、障害者のためだけに行っている活動ではなく、それに関わる全ての人、地域社会が変わる、大きな意味のある活動なのです。

ベタニーホームでは、年間を通して様々なイベントを開催していますが、いずれもボランティアの力が必要不可欠です。そんな中、先日行ったキャンプでは、SOで出会ったボランティアと嬉しい再会をしました。広く青い空の下、障害者が社会の一員として受け入れられる"心のバリアフリー"が、今、少しずつ動き始めています。

SOにて、メダルをもらいこの笑顔。

今後、より多くのアスリートがSOに参加できますように ...

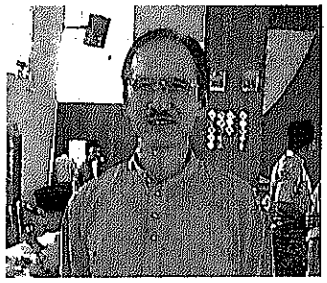
ひまわりのように明るい子どもたち。人種に関係なくみんな仲良しです。

ボランティアの技術移転

34

任期：2004.4~2006.4

須山 勝彦
シニア海外ボランティア / 電子工学
（人的資源省）



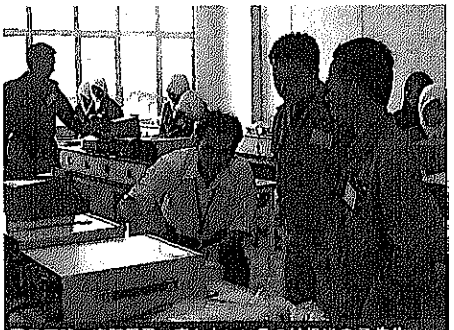
ペナンから高速道路を40分走るとクリムの工業団地に着く。そこから更に山道を30分走ったところに勤務先の学校、高等技術訓練センターがある。1年前ここに赴任した時、JICA事務所のAさんに“とっても遠かった、でもいいところですよ”と言われていたので覚悟はしていたが、行けども行けども油椰子のプランテーションで、学校の給水塔が遠くに見えたときには思わず歓声を上げてしまった。

勤務先の学校で私は唯一の外国人である。従って、皆が私の存在を、少なくとも変な外人が居ることを知っている。問題は仲間と認めてもらえるか、お客さんと見られるかで、仲間と認めてもらうためにはやはり努力をしなければいけない。土地の言葉を喋ることが一番大事だが、マレーシア語は比較的簡単とはいえすぐには上達しない。せめて形だけでもと思い、出来るだけ現地の人と同じような生活をするよう心掛けている。マレー人は食事を手で食べるので私も学校の食堂では手で食べている。私が1人でいると、あとから来た人が話しかけてくる。何処に住んでいるのか、子どもは何人いるか、マレーシアの食べ物は好きか、日本でも手で食べるのか等々、世間話なので片言のマレーシア語で答えると、仕事で直接関係の無い教職員ともすぐ友達になれる。食堂のおばちゃんまでもが暇だと私の前に座って、話しかけて来る。私は学校ではパッスー（Pak Su）と呼ばれている。末っ子の叔父さんという意味があり、私自身も結構気に入っている。

マレーシア政府は産業の近代化を急ぎ、高度な技術教育を行う学校を次々と作っている。私の学校もその1つで2001年開校である。かなりの予算を掛け、最新の施設や設備を備え、また教師も優秀で向学心に燃えているが、教育内容を充実させるにはもう少し時間が掛かる。一般に技術援助というと設備を供与し、その使い方や修理法を教えることが多いが、マレーシアはもはやこのような段階は卒業している。最新設備や高級技術ではなく、お金では買えないもの、経験に基づく実務ノウハウというか、そんなものが不足しているように思う。

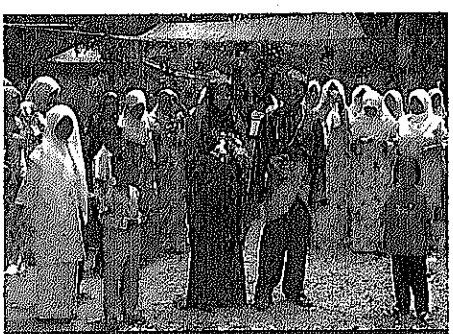
マレーシアでの活動にも慣れてきたが、先日副校長に“当校は北部地区の中小企業を技術的に支援する使命がある”と言われ、はっと気が付いた。着任してすぐ学校の状況を調べ、専門技術の実技のレベルが低いがそれよりも工場の監督職としての管理科目の教育がおざなりであることがすぐ分かった。しかし、私の日本的な考えで、これだけ最新設備の整った技術学校で管理科目を教える必要はない、それより教師の技術レベルを上げるべきだと、今までこの問題に目をつぶってきた。ところが生徒の実習先の工場を訪問してみると、技術は勿論だが現場のリーダーの人材が不足していること、地場の中小企業は社内で教育する能力も時間も無く、学校に人材養成を期待していることが分かった。日本人の目から見ると学校の技術レベルはとても低いが、その卒業生が社会に出て、りっぱに役立っている。今の日本と比べるのではなく、昭和30年台、40年台の日本と比べなければいけない。

ボランティアは自分にできることを必要としている人に提供する行為ですが、与えたいこと（こちらの都合）をまず考えてしまいがちです。相手が最も必要としていることは何かを考えるべきです。これは国、地域、援助の分野によって違うので、これで良かったのか、他に方法はなかったのかといつも試行錯誤の連続です。1年1年新しい悩みがあり、それを克服する楽しみがあり、また少し成長できたと実感できること、これが国際協力ボランティアの醍醐味かもしれません。



電子回路の実習風景。真ん中にいるのは担当のZ先生。

断食明けのパーティーで、電子科の先生方と。
左端は校長先生。



カンボンの結婚式。
若い先生が多いので、今まで7回、結婚式に呼ばれました。

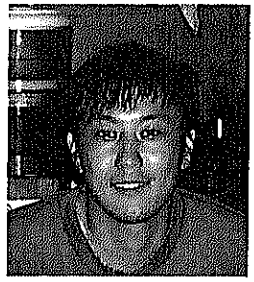
干潟に舞う渡り鳥

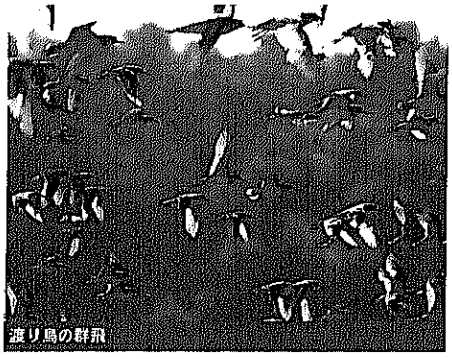
任期：2003.12~2006.6

水谷 晃

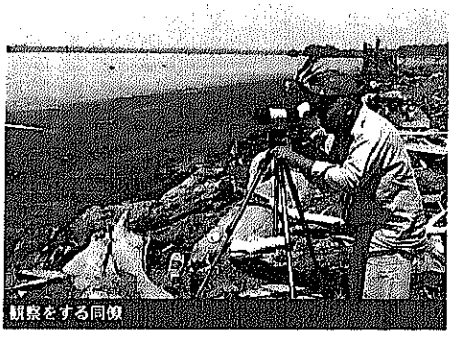
青年海外協力隊 / 生態調査

（サラワク州森林局国立公園野生生物課）





渡り鳥の群飛



観察をする同僚

村の美女（将来有望？）

私は、青年海外協力隊の“生態調査”という職種でサラワク州に派遣されています。調査対象の生き物は、“水辺の鳥”たちです。ここでは調査で訪れる島、そこに飛来する鳥、そして活動について紹介します。

配属先はクチンという州都にあります。そこからバスや船をまる一日乗り継いだ先に“ブルイ島”があります。島の海岸沿いには“ムラナウ族”の住む村々が点在していて、その一つ“ブルイ村”でホームステイをしながら水鳥の調査をしています。村の男たちはもっぱら魚やエビを獲る傍ら、時季に合わせて稲やスイカなどを育て、時には家を自力で建てたり。そんな日常で筋骨隆々のいかつい体格に浅黒い肌、おまけに目だけがギョロリと光っていて、いやはや海外経験の浅い私にとって初渡島の際は“…おっかねぇ”と、ビクビクしていました。村人もまた、鳥ばかり見てはニヤニヤしている怪しげな日本人を，最初は遠目から伺っているだけでした。でも、日を追うごとに少しずつ気心が通じ、今ではクリクリ目玉の子ども達はキャッキャとついて回り、冠婚葬祭には有無を言わさずかりだされ、まるで村人の一員同然に接してもらっています。

この島の海岸にはマングローブ林が生い茂り，海との間には潮が引いた時にだけ広大な“干潟”が出現します。実はこの環境は豊富な海産物を育み、人々も多くの恩恵を授かっています。良く目を凝らして見れば、泥の上にはカニやゴカイ、ハゼなどが所狭しとうごめいていて、サギ、シギ、チドリ、アジサシなどの水鳥たちもまた、それらを餌に集まってきます。そしてまた彼らの多くは“渡り鳥”でもあります。春から夏にかけて北半球の各地で子育てをし、秋に日本や東南アジアを経由しながら赤道付近や、果てはオーストラリアまで渡って冬を越します。
しかしこの長い旅路は、鳥たちにとって決して容易いものではありません。力尽きて落ちた鳥とこれまで何度か出会いました。
この島の干潟は、そんな彼らの翼を休め、栄養を補給する重要な場でもあります。私の受けた要請はこの水鳥たちの現状（例えばどの鳥が、いつ、どこに、どれくらい？等）を調査し、保全対策を練ることです。

さて、今日の私たち日本人にとって、干潟、あるいはそこに生きる生物たちは、馴染みの薄いものとなってしまったかもしれませんね。日本の干潟の多くは埋め立てら、農地や宅地などへと姿を換えられました。残された僅かな干潟も周囲を護岸で固められ、何やら異臭が漂い…、そんな場所に鳥たちは何とも寂しげにたたずんでいるかのようです。

果てしなく続く島の海岸や、その前に広がる干潟の上で腰を下ろし、そこに息吹く生き物の営みをただ眺めている時、ふと思うことがあります。“あぁ、こんな光景、日本ではもう見られないな…”と。私たち生態調査の隊員ができることの一つ、それはきっと物言えぬ自然の声を汲み取り、それを多くの人に伝えていくことなのでしょう。この干潟と渡り鳥に限っていえば、本当ならばすでに取り返しのつかない日本の人々へも伝える義務があるのではないだろうか、今はそんな気がします。

マレーシアの障害者アスリート

36

任期：2004.4~2006.4

白井 健介
青年海外協力隊 / 水泳
（マレーシア障害者スポーツ協会）

障害者スポーツについて皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか？

障害者に対するリハビリテーションの一環として始まった障害者スポーツも今や競技スポーツとして姿を変え、健常者さながらの激しい競い合いが繰り広げられています。日常の練習もハードで、多いときには水泳では一日で6,000m以上の距離を泳ぎます。もちろん彼らは体の一部が動かなかったり、無かったり、目が見えなかったり、色々な障害を持っています。しかしその障害に負けない力と持ち前の明るさで日々練習をこなし、国内・国際大会での好成績を目指しています。

私は今、障害者水泳マレーシア代表選手の強化の為にサラワク州クチンで障害者水泳選手の指導をしています。なぜ代表選手の強化なのにサラワク州なのか？それはサラワク州が障害者水泳代表選手を6割以上抱えている障害者水泳大国だからなのです。しかしなぜ人口が多く高層ビルが立ち並ぶクアラルンプール等の都市部ではなく、自然が豊富に残されているサラワク州なのか。その答えはサラワク州に流れている沢山の川が大きく関係しているものと思われます。

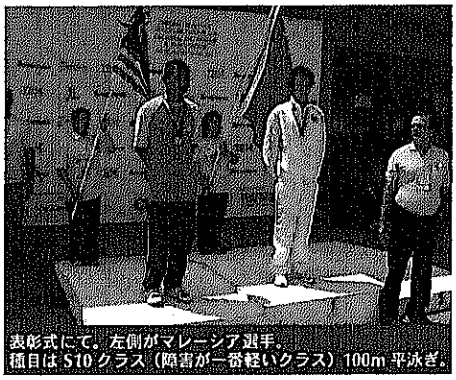
マレーシアには日本ほどプールが沢山はありません。体育の授業もマレーシアにはありません。その為、小さい頃からマレーシア人が普段から水に慣れ親しむ機会は日本と比べ格段に少ないのです。障害を持っている人なら、なおさらその機会が限られてくるでしょう。そこでマレーシアでプールの代わりとして活躍しているのがサラワク州の川なのです。サラワク州の人々は小さい頃からその川で水と親しみ、自然と泳ぐ為に必要な技術を身に付けていったという訳なのです。今現在も普段サラワクの田舎に暮らしていて、川で練習をしている障害者水泳の代表選手がいるというから驚きです。日本では絶対に考えられないことですが、その常識を打ち破るパワー、それがマレーシアの魅力のひとつであると私は思います。

先日サラワク州クチンで日頃私が指導している選手の中から、今年9月16日から25日までブラジルで開催された「ISMWSF世界車椅子スポーツ大会」の代表選手に2名選出され、私も彼らのコーチとして帯同してきました。大会には日本チームの参加は残念ながら無かったのですが、マレーシアを含む世界44カ国700人以上の選手が参加し、ハイレベルな試合を繰り返していました。

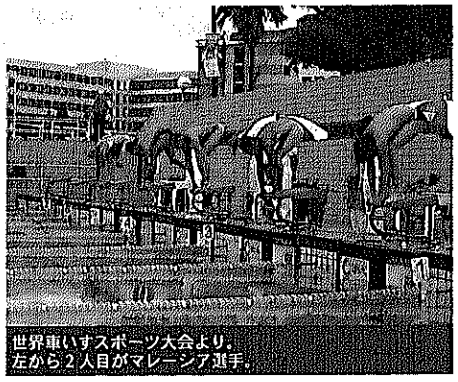
水泳競技ではマレーシアは銀1個、銅1個の計2つのメダルを獲得することが出来ました。向こうの気候は20°C前後でプールも屋外だったので、少し（マレーシア人にはとても・・・）肌寒く環境的にも体調的にも万全ではありませんでした。しかしそれにも関わらず自己ベストを更新してのメダル獲得は、来年マレーシアで開催予定のFESPIC大会や2008年北京パラリンピックに向けての大きな一歩に繋がるのではないかと思います。

しかし喜んでばかりいるわけにもいかないのも事実です。メダルは獲得したものの、欧米人との体格・筋力の差など、世界との差を大きく感じられた面も多々見受けられました。これからマレーシアがその差を埋める為には、更なる技術向上や、今までの何倍もの努力が必要であると思います。

頑張り続ければいつか夢は叶うもの、将来マレーシアも世界のトップと渡り合えるようになるのは決して不可能ではありません。教え子たちのパラリンピックでのメダル獲得を夢見ながら、これからも精一杯マレーシアの障害者スポーツの発展に力を注ぎたいと思います。



表彰式にて。左側がマレーシア選手。
種目はS10クラス（障害が一番軽いクラス）100m平泳ぎ。



世界車いすスポーツ大会より。
左から2人目がマレーシア選手。

ブラジル直前合宿での集合写真。

マレーシア漁業とその発展に向けてのJICAの取り組み

37

任期：2003.6~2006.6

羽鳥 達也
JICA 専門家 / 漁業地域開発

トレンガヌ州セテューの漁民。季節風の運ぶ砂の影響で漁港が建設できないため、子どもも手伝って人力で揚船。

マレーシアで魚というと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？漁村でクロボや干物などを売っている露店を見た方もいらっしゃると思いますが、普段は安心して刺身にできそうな地物の魚には出会うことはなさそうです。

マレーシアには約9万の漁民がいるとされていますが、その多くは一本釣り等の伝統的な漁業を営んでいる零細漁民です。また半島東岸には農林業との兼業漁家や上記のような露店を家族で営んでいる漁民が多いです。多くが低所得層であり、マレーシア第9次計画で撲滅を目標としている絶対貧困層に属する漁民が1万人近くいるということです。
このように、漁業はマレーシアの産業の中では、一部の大規模経営体以外は、経済発展の中で取り残されている産業と言わざるを得ません。

以上のような背景の中、1971年に農業省直轄の組織として創設されたマレーシア漁業開発公社（以下LKIM）は、マレーシア漁業の振興と漁民の社会経済的地位の向上を目標として現場に密着して活動しており、2000年からは日本の漁業インフラや漁業管理を学ぶため、日本の水産庁からJICA専門家を招聘しています。私は2代目にあたり、漁港インフラ整備を主に助言していた前任に続き、政策アドバイザーとして漁業地域開発計画の立案について助言をしています。

LKIMの本部はKLそごうのそばにありますが、ネグリ・センビラン州を除く、12の州に事務所があり、また78の漁民組合に職員を派遣して組織・経営強化を図っており、職員の多くが地方で現場業務に従事しています。
私の拠点は本部ですが、マレーシア各地の漁村に出張することも多く、地方職員とも密接に連携して仕事を進めています。また、漁民と交流する機会も多く、片言のマレー語で何とか意思疎通を図ろうとしています。
地方出張では、漁業の情報はもとより、自然、社会及び文化等の背景を極力把握するようにしていますが、度々日本との共通性や、先人の交流の足跡に触れ、新鮮な感動を伴ってアジアの国々との連携の大切さを強く感じます。サラワク州ではイバン族がアイヌの文化と共通の文化を持つことや、同州ムカーでは「ウマイ」という魚のタタキをチリソースにつけて食べる習慣があることを知りました。現地のスタッフは日本から伝わったのではと言っていますが、真偽のほどは明らかではありません。

一方、LKIMからは多くの職員が東方政策の研修などで訪日しており、日本が話題に上ることもしばしばです。彼らの日本の印象は「忙しくて物価が高いが、自然や町の景観は美しい」、「日本はすごいけど、金持ちだからできる」というのが相場です。
私は役割上、かなり突っ込んだ議論をすることもあり、職員の多くが当初、「必要性は理解するが、マレーシアではできない」という反応を示しますが、日本での実地研修に招いて、実例に接した後は、改善意識が芽生え、可能なところから手を付ける姿勢に変化します。
このように、専門家の直接の助言をベースにし、これに現場職員に対する研修を組み合わせたJICAの技術協力は、その成果が直接現場に反映されることから、LKIMからは高く評価され、逆に、我々日本の一般公務員からすれば、うらやましい限りです。

最後に、多極化の中でマレーシアは東方政策から脱却しつつあるといわれますが、漁業の世界でも日本型産業管理はマレーシアにとって引き続き、良きモデルになりうるものと確信しています。

パラワイ漁協婦人部と筆者（前列左端）。
同婦人部はサルディン（そぼろ）などを製造

州政府等関係機関に対する漁業地域開発計画説明会にて

清潔なウマイ加工場。
サラワク州主要都市に航空便で出荷。1パック10リンギ

シニア海外ボランティア(SV)の発展途上国における技術移転

38

任期：2004.4~2006.4

小林 康男

シニア海外ボランティア / プラスチックス成形加工技術
（ケダ産業技術開発センター）

KISMEC 玄関で。右端はカウンターパートの En. WISHA。

筆者の自己紹介と勤務先 KISMEC の紹介：
日本人会の皆さんお元気ですか？私は、プラスチックスの成形加工技術を発展途上国に移転する目的で、JICA から派遣された和歌山県出身の小林みちおです。私は今、日系や多国籍企業の工場が多い、ケダ州 スンガイプタニの KISMEC（Kedah Industrial Skills and Management Development Centre：ケダ州立産業技術管理開発センター）で活動しています。

KISMEC は、企業から派遣される職業訓練生と、一旦学校を退学したスクールリーバーを教育して産業界に送り返す目的の職業訓練校の一つでした。KISMEC は、この職業訓練センターとしての活動のみならず、(1) プラスチックス、(2) 電気・電子、(3) 情報技術（IT）の 3 コースにおいて、自ら開発した新技術やその管理開発手法をプログラム化し、ASEAN 諸国内で尚発展途上にある、インドネシア、ベトナムのカレッジ等に教育プログラムを提供しています。特に、プラスチックスコースは周辺企業からの射出成形技術の高度化・深耕化という技術ニーズに応えるため、このほど、州政府、連邦政府等から合計 250 万リンギット（約 7,500 万円）の機器整備費用が認められました。2006 年度からは、成形加工機器のみならずプラスチックスの分析物性評価機器も揃えて、近郊各社への技術指導の強化はもちろん、マレー半島北部のプラスチックス技術センターにもなることを望んでいます。

シニア海外ボランティア（SV）のミッション：
KISMEC が半島北部の技術開発センターになるというミッションを達成するため、筆者は KISMEC のカウンターパートと相談して、これまで実施してきた技術指導、即ち、(1) 非晶性プラスチックスと結晶性材料成形法の相違、(2) シートやフィルムへの 2 次加工技術の習得、(3) 成形品の品質管理、等のテーマ実施を加速する一方で、(a) プラスチックスのキャラクタリゼーションとその分析・物性評価機器の操作指導、(b) その測定結果の解析法の指導を、任期満了（06 年 4 月 7 日）までにできるだけ多く実施します。

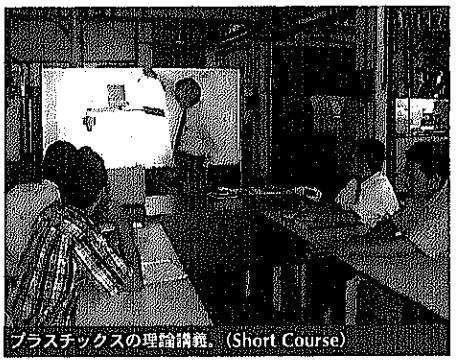
マレーシアのプラスチックス成形技術とその産業の現状：
ここで、マレーシアのプラスチックス産業とその技術の現状を概観します。

(1) 結晶性の PE、PP 樹脂は PETRONAS が、また ABS 等非晶性原料樹脂は、日系メーカーがペナンで製造。PC や PET 等のいわゆるエンプラは安価で購入可。原材料面では問題なし。(2)シンプルな構造の金型はマレーシアで内製可。(3) 成形機とその周辺機器の大部分は日米欧から輸入。(4) 最も大切なユーザーは、スンガイプタニ近郊にたくさん存在する、そして、(5) 競争は激しいが、製品販売マーケットも大きい、というわけで、ないのは唯一、精密成形品を製造する技術のみです。つまり、成形時の適切なトラブルシューティングや、不良品を出荷しない品質管理体制を構築することによって、顧客の信頼を勝ち取ることが先決です。

筆者がローカルの成形工場を見学した際、製品品質の向上と、成形機器の稼働率向上が必須であるにもかかわらず、その改善のかなりの部分を、労働意欲に乏しい若年労働者の、5S や小集団活動に依存している現状は、早期に改善の必要があると思いました。さもないと、ベトナムやインドネシアの勤勉な労働者に、技術力で先を越されます。

SV 活動の統括と技術移転の功罪：
KISMEC が、訓練生のトレーニングセンター、周辺企業の技術アドバイザーさらにはプラスチックスの分析物性評価センター機能まで持つためには、現スタッフの知識・経験等では不十分です。筆者の KISMEC における SV 活動は、今の時点で、現状に変革を与えるまでに至っていませんが、研修生のトレーニング手法や周辺企業への技術アドバイスのレベルは着実に上がっています。後任 SV の強い指導で、KISMEC が本当に技術開発センターとなれるよう願っています。

射出成形技術指導。


プラスチックスの理論講義。(Short Course)

Vietnam での MOU 調印式。
右三番目が Exec Director の Mr. WAN ISMAIL IBRAHIM。

みなさんは、サバ州にある クロッカー山脈公園をご存じですか？

任期：2004.4~2006.4

岩田 周子
青年海外協力隊 / 生態調査
（公園局クロッカー山脈公園事務局）

水田とクロッカー山脈

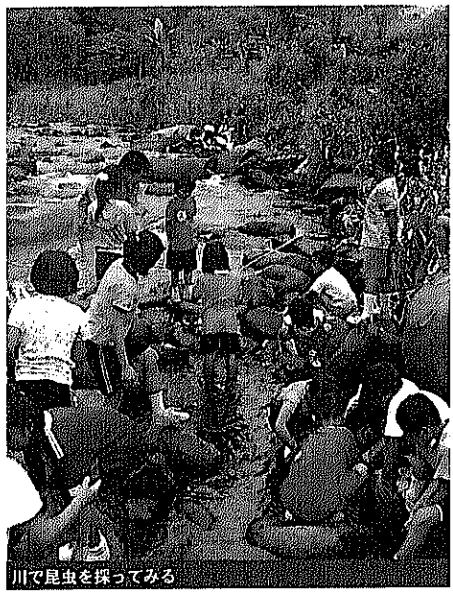
サバ州の北から南にかけて、クロッカー山脈が走っており、このエリアが公園に指定されています。広さは139,919ha（シンガポールの面積の約2倍）あり、サバ州にある7つの国立公園の中では最も広い面積を誇ります。ただ、キナバル公園のように東南アジア最高峰を拝めるわけでもなく、海洋公園のように熱帯魚に簡単に会えるわけでもありません。もちろん植物・動物ともに多様性は非常に高いのですが、珍しい生き物に森でそう簡単に出くわすことはないのは、皆さんもご存じではないかと思います。
この公園は派手さにかけますが、周囲にある8つの郡、および州都であるコタキナバルへの水瓶の役割を持っています。公園からは、多くの河川が流れ出ており、周辺住民はその水を利用して生活をしているのです。ここに、この公園の最大の存在価値があります。
ただ、我々が使っている水が、クロッカー山脈公園から流れ出ていて、公園が保全されているからこそ安全な水が得られるのだということを知っている周辺住民はまだ少なく、そもそもクロッカー山脈公園の存在すらまだ知られていないというのが現実です。

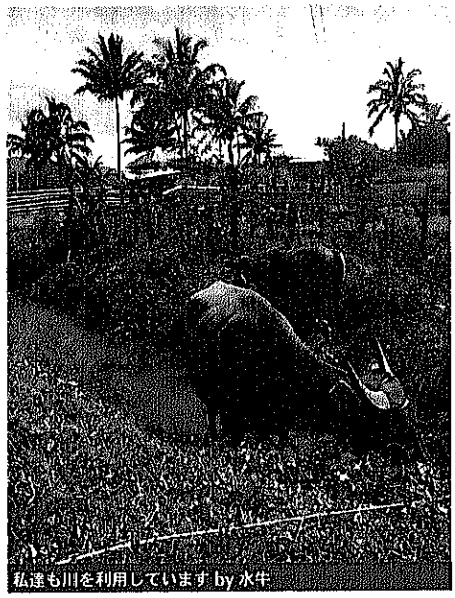
私は、この公園で青年海外協力隊として活動しています。
現在最も力を入れている活動は、周辺住民に対する河川の重要性に関する環境教育活動です。公園内に設置されているサブステーションを拠点として、これまでに何度か、小・中学生を対象としたプログラムを実施してきました。これらのプログラムを通して、まずクロッカー山脈公園の存在や、どんな環境があるのかを知ってもらい、その自然の豊かさを感じてもらえればと考えています。そして、クロッカー山脈公園の大切さに気づき、保全したいという気持ちを持ってもらいたいです。

河川というのは、森から出て、人の暮らす地域を通り、最終的には海に達するという流れがあります。ですから、きれいな水の出てくる「公園」と、自分たちの住んでいる「公園の外」のつながりを考えるのによい材料です。「公園の外」の河川の状態は、悪化しています。それは、河川周辺の過剰な土地利用や、農業・工業用水としての取水及び汚染された排水の垂れ流し、そして、住居から出る汚水などが主な原因となっているでしょう。このような、破壊されつつある河川と、クロッカー山脈公園内の自然のままの美しい河川とがつながっているということが理解されれば、何故自分達の周りの河川と公園内の河川はこのように違うのか、住民の人達が自ら考える基にもなるかもしれません。そのような、自分の周りの身近な環境を見直せることも期待しています。

私は、幼い頃に自然に囲まれた場所で過ごし、よく父親に、近くの川に泳ぎに連れて行ってもらいました。ヤンマや、腹の赤いイモリがいたり、小魚がぴょんぴょんとはねていたり、あの頃の思い出は鮮明です。自然の中で駆け回った経験が、現在の私の進路を築いていると思います。豊かな環境と触れた体験を持った子どもは、大人になって環境に少しでも配慮できる気持ちを持つようになれるのではないでしょうか（もちろん体験がなくても、持てるひとはたくさんいますが！）。
環境について少しだけ考えるきっかけを、これからも提供していければいいな、と思いながら活動しています。私の任期は残り3ヶ月ですが、新しい協力隊も一人入っており、これからも活動は継続します。今後の動きが楽しみです。

実は、マレーシアに来るまでは、トンボの研究をしていた大学院生でした。河川に関する知識も付け焼き刃で、本で読んだこと、話できいたこと、などが多かったです。こちらでの活動を通して現場経験を積むことができ、現地のひとに何かを教えたな、というよりは、自分が得たもののほうが多いという印象です。ここで仕事ができて本当によかったと思います。


川で昆虫を採ってみる


私達も川を利用しています by 水牛

マレーシアの海上保安庁始動！

40

任期：2005.6~2007.6

土屋 康二
JICA 専門家 / 海上警備救難プロジェクト

Malaysian Maritime Enforcement Agency、略してMMEA、直訳すると「マレーシア海上法令執行庁」、わかりやすく言えばマレーシアの海上保安庁、これが設立決定から3年余を経て昨年11月、マレーシアで誕生した新しい機関です。

マレーシアといって真っ先に思い浮かぶのは、人によって様々でしょうが、海や船に関わっている人にしてみれば特に「マラッカ海峡」ではないでしょうか。このマラッカ海峡の重要性については、中東から日本に運ばれる原油の8割がこの海峡を通過するということからわかるように、日本の生命線とも言え、日本周辺の海と同様に大事に考えていかなければならない海域である、ということがいえるでしょう。

海は世界につながっており、島国である日本の場合、良いものも悪いものもすべて海からやってきます。世界がグローバル化していると言われている今、いろいろなものを運んでくる海の安全を確保し、これを平和的に活用することは、今や全世界共通の課題と言えます。ところが、海は多少ややこしく、(1) 各国の主権統治下にある「領海」(0～12海里/22km)、「排他的経済水域」(12海里～200海里/370km)、「公海」といった海域によってルールが異なり、また (2) その海域に責任のある沿岸国によってその統治能力に大きな差があり、(3) そのような海を様々な国籍の船が自由に往来しているという現実があります。

MMEA に移管前の船

翻ってこのマラッカ海峡というのは、その南側のシンガポール沿岸海域も含めて「マラッカ・シンガポール海峡」と呼ばれていますが、ここは、マレーシア、インドネシア、シンガポールいずれかの領海、つまり領土と同じ扱いとなっています。例えば、日本に向かう船、原油はもちろん、天然ガス、木材、パーム油等、この海峡を通り日本に運ばれますが、船はもちろんその積荷、船員の安全はその海域を抱えている国々に守ってもらう必要があります。そのためには、それぞれの国の治安担当機関の能力向上に協力する必要があり、また、もし、そうした機関が存在しなければ、その設立を支援しましょうということで、JICAを通じた国際協力が始まりました。

このマレーシアの海上保安庁は、各行政機関がそれぞれ船を持って仕事をすることは非常に効率が悪いことから、各機関の海上の取締り部門を切り取り、海難救助を含めたひとつの組織にすべてをやらせようという考えのもとに設立されました。昨年6月の着任以来、この組織のなかで仕事をしていると、着々と必要な作業が進んでいるのがわかります。同組織にとって必要不可欠な船は、海上警察、海軍等関係省庁から移管され、順次修繕のうえ色も白く塗り替えられ、装いも新たに生まれ変わりました。また、各職員も海軍をはじめ関係省庁から集められ、マレーシア政府の強いイニシアティブと意気込みが感じられます。

昨年の着任挨拶時、この組織の仕掛け人ともいえる首相府国家安全保障局の部長が、(1) 新しく法律も作りすでに成立させた。職員も4,000名までのポストを用意した。船も順次移管させ、後は職員を採用するだけ。(2) この新組織に57年の歴史をもつ海上保安庁の成功例、失敗例等、そのノウハウを伝えてほしい。(3) 有事の組織の海軍とは違い、平時の組織であり法のもと業務を執行するのがコーストガードであり、敵と思えば撃ち殺してしまう軍隊とは違い、危険を伴いながらもまず職務質問から始めるといった法執行時の考え方を徹底させてほしい。(4) 船、航空機といったものは買える。大事なのは人材育成であり、日本の海上保安庁職員の仕事に対するカルチャー、メンタリティーを彼らに伝えてほしい等、熱く語られていたことを思い出します。

新しくなったMMEAの巡視船

今後、マレーシアの港で白い船体に赤色と青色の斜めのストライプ、そしてニックネームとしてマレー語でMaritim Malaysiaと書かれている船を見かけましたら、それはまさしくマレーシアに新たに誕生した、マレーシアの海上保安庁、MMEAです（こちらもご参照ください www.mmea.gov.my）。

MMEAの制服とロゴ

東海岸クママンに元気な訓練校 TATI があります

トレンガヌ高等技術学院

41

任期：2004.11~2006.11

小屋 慶弥

シニア海外ボランティア / ポリマー & プラスチック
（トレンガヌ高等技術学院）

マレーシア半島の東海岸、人口 95 万のトレンガヌ州クママンの高等技術学院でプラスチックの成形加工を教えています。私は九州博多産、育ちは神奈川県相模原市、現在は岡山在住です。

クママンは人口 15 万、トレンガヌ州第二の都市で工業都市化を目指して企業誘致に熱心です。トレンガヌ州の最南端に位置し、南隣が Pahang 州の州都 Kuantan です。敬虔なイスラム教徒が多く、大変に親切な、人懐こい人が多いように思います。当地に来る前にはクママンはマレー語だけで英語が通じないのではないかと脅されてきましたが、そんな心配はまったくありませんでした。

わたしの勤務するトレンガヌ高等技術学院（TATI）はトレンガヌ州が東海岸の工業化の人材養成のために 10 年前に設立したもので、創立式典には当時の首相のマハティール博士がこられたことが一つの自慢の種になっています。そんなこともあるかどうか、学校運営には州政府も学院スタッフも熱心で、800 人余の学生を約 90 名の教育スタッフが行き届いた指導をしていることを感じます。
Skill Diploma Programme には Tool & Die Making、Design など 7 コース、Highter National Diploma Programme（HND）には Electronic, Automotive など 7 コース、それに Degree には 2 コースがあり、小生の担当するプラスチックは Diploma Programme の中に Polymer Technology コースがあります。

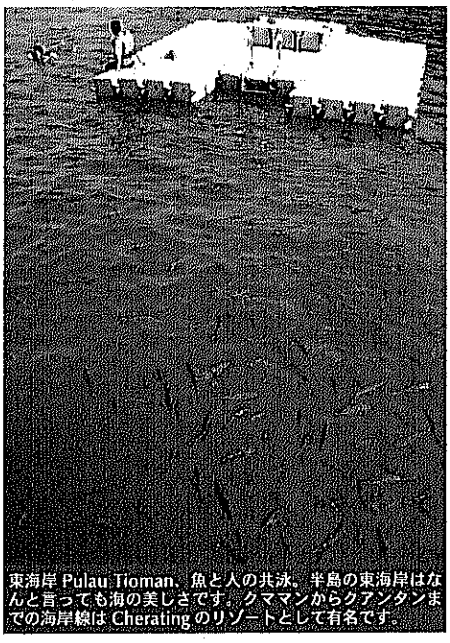
近い将来 TATI は Collage - University の新設を考えています。昨年 7 月に新しくスタートしたポリマーコースはまだ陣容が整っていませんが、学生の意欲は旺盛で昨年 10 月から Introduction to Polymer について講義した感触からして、多くの学生がプラスチックを専攻した目的意識を持っており、学生の満足のいくカリキュラムを提供したいと思います。機械の導入と Teaching Staff の採用が遅れていることが心配ですが、Teaching Staff が整い次第、現有設備で実務的な指導を行うべく、プラスチックの成形加工の要素技術をわかりやすく整理し、スムーズな技術移転が出来るように準備万端です。

今回お話したいのは当 Institute で行っている Co-Curriculum の日本語教育についてです。1 年を 2 Semester に分け、今 Co-curriculum として日本語が設けられました。これを私が引き受けることになり、当初、果してどれほどの学生が集まるのか危惧していましたが、名簿に 35 名もあり、本当に付いて来るかと心配していました。
中間テストを先日行ないましたが、20 名が受験してくれ、ホットしているところです。日本語熱が盛んなのはなんとなく感じていましたが、その原因がわかってきました。日本の漫画（アニメ）とハイテクノロジー製品のお陰でした。インターネットでアニメがダウンロードでき英語のスーパーが入りますが、言葉が日本語のまま、これを理解したいという意欲です。長い日本語を諳んじてきてどういう意味かと尋ねて来ます。「どらえもん」にお菓子の「どらやき」が出てくるそうですが、どんなものかといいますので、日本へ帰った折に土産で持ち帰りました。日本の着物、お祭り、若い人のファッション、てんぷら、寿司など、電気製品、自動車、ゲームソフトの値段、更には富士山や長崎広島の様子、ロボットの会社、博物館の数などなど大変な興味です。
最近構内ですれ違う学生さんが日本語で挨拶してくれます。見ると受講者でない学生だったりして、日本語が横に広がっていることを感じます。まだ簡単な言葉ですが、少なくとも日本と日本人に関心を持ってもらうことが日本語勉強の第一歩とうれしく思っています。
Teaching Staff にも日本人に興味を持ってもらい、その結果プラスチックの世界の面白さと実務を通して経験してもらうことが一番早い技術移転ではないかと思います。

クママンに日本と日本人に興味を持つ人が一人でも多くなるようにと思います。

日本の製品カタログを見ながら談笑。毎回テキストを配布し Oral Practice 中心となりますが、早くカタカナを教えてくれなどあれこれの要求がうれしいです。

TATI の卒業式典にて（中央は SV）、Teaching Staff はガウンに角帽です。



東海岸 Pulau Tioman、魚と人の共泳。半島の東海岸はなんと言っても海の美しさです。クママンからクアンタンまでの海岸線は Cheratingのリゾートとして有名です。

楽しい毎日。それにしても暑い！

42

任期：2005.4~2007.4

小嶌 章敬
青年海外協力隊／木工
（モンフォート職業訓練校）

マレーシア、サバ州、コタキナバル近郊の町Penampangに滞在して既に1年。貧困家庭の男の子たちを対象にした職業訓練校で木工を教えています。生徒は17～19才で、ほとんどがカダザンドスン族の男の子たちです。みんな日本の同年代の男の子と比べると少し幼い感じがします。

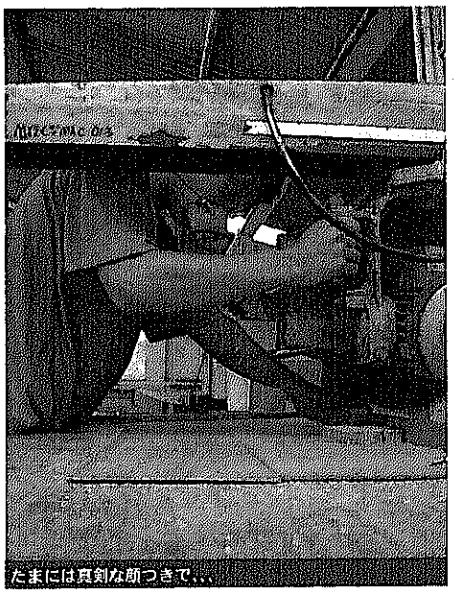
生徒数は58名、全寮制でSabahの各地から、Keningau、Papar、Kota Marudu、Paitan遠くはTawau、Sandakanから来ています。
学校では海や山にキャンプに行ったりする行事も多く、生徒と一緒に森の中に入ったりするといろいろな、食用、薬用になる植物を教えてくれます。周囲に山や森がある中で生活していたりしたせいでしょうか。テントを設営するときや、ヤシの実をさばく時など、刃物の取り扱いに慣れていてとても上手な事にも気づかされました。木工作業中にケガをした生徒を未だに見ていません。私自身が指を切ってしまうぐらいです。
彼らは音楽が大好きで放課後、食事の後、休みの日などはギター伴奏の歌声が学校内のあちらこちらから聞こえてきます。
お祝いの席では必ずSumazauといわれる踊りが見られ、普段はわりと授業をサボりがちな男の子もSumazauの練習には欠かさず参加し、真剣な面持ちで踊っていました。
学校のスタッフもほとんどカダザンドスン族の人たちです。とても陽気な人が多く、仕事帰りにはお酒を飲みに行くこともあります。イスラム教徒ではないので豚肉も、お酒もOKです。

そういった感じで生活の面では本当に楽しい事ばかりですが仕事に関してはいろいろな問題があります。最初に突き当たったのは寸法の問題。
Sabahでは家具の製作の際、通常inchを使用するようなのです。お店に行ったら木の板やスクリューを注文する時はinchです。もともと仕事はおおざっぱで、inchを使用しているが為に扉の隙間とか、一つのものを等分にする際など計算が細かくできません。
驚いた発見もありました。街の金物屋さんにいってネジを見ていたら、商品はすべてmm表示だったのです！お店の人も，買いにくる人もわざわざinchに換算していました。「なんで～!?」家具に使用する金具の寸法もmm表示が普通でした。
よって、現在はmmで作業をするようにしています。将来はinchでもmmでも作業できるようになるといいなと思っています。

木工はもともと感覚を基に仕事をする事が多く、寸法も目盛りのないところを読んだりもします。日本語でさえ伝える事が難しいものを、不十分なマレー語、英語で伝えようとするので大変です。そういったときは手取り足取り、体で覚えさせたり、最後は私自身の仕事のやり方をまずは見てもらってあとは自分自身で考えてもらうしかありません。
どの場所にはどの材料を使えばいいか？どこでどのように固定すれば良いか？デザインという美的、実用的要素を兼ね備えたもの、仕様を教えるのは大変で、どういったものが良いものかがなかなか伝えにくいです。そして「何がキレイか、美しいか」というのは一人一人、価値観がちがうと思うので押し付けませんが、商品として市場に出るモノを作る以上は安全であったり、使えるものでなければいけません。そういった事も価値観が違うのでどのように伝えるか難しい課題の一つです。

課題はほかにもあります。「集中力を維持させる」「モノを大事にする」「個性を育てる」「仕事に対する意欲を持たせる」どれも基本的で大切な事です。
残りの1年、少しでも多くの事を多くの人たちに伝えていけるよう活動していきたいと思っています。生徒の為に、サバ、マレーシアの為に、そして自分の為に。

作業の合間のTea Time。今日は畑でとれたとうもろこし。


たまには真剣な顔つきで、

近くの森から取ってきた葉でいとも簡単に屋根を作ってしまう。

コタキナバルで
海外ボランティアによる養殖技術の広域研修

46

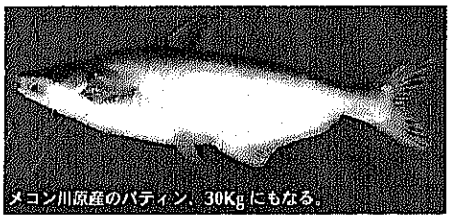
任期：2005.4~2007.4

小嶋 洋之
シニア海外ボランティア / 水産科学
（サバ大学ボルネオ海洋研究所）

閉会式を終えて中庭で記念写真。左端が筆者、右端が瀬尾教授。

Seed supply challenge for aquaculture devt

Daily Expressなどが閉会式を伝えた。



メコン川原産のパティン、30Kgにもなる。

開腹して採卵、目方を量る。

日本人会の皆様、こんにちは。2005年の春から、コタキナバルに妻と15歳になるネコを連れて来ています。ここでは、私の勤めるサバ大学ボルネオ海洋研究所で、この2月に開いた広域研修を紹介します。

先日5月始め、学生実験に使うために昨年11月に頼んでおいた薬品が届いたことが知らされました。実験予定の1月どころか、学期がすでに終わってしまっていました。実験機材の多くはシンガポールから来ます。サバ州では値段がびっくりするほど高いばかりかいつ届くかわかりません。そんな地で年度途中に追加申請をして、短期間で広域研修を実施することになりました。JICAの広域研修制度は、近隣の国で同じ技術分野のシニア海外ボランティア（SV）や青年海外協力隊員（JOCV）が集まって技術指導法を研鑽しようと言うものです。

開催のきっかけは、ここの所長がJICAの援助でマレーシア人向けに養殖技術の研修会を開けないかと打診してきたことでした。もちろん広域研修の趣旨は違うのでダメですが、国内研修者をオブザーバーとすることで開催となりました。最終的にはラオスの二つの県の養殖施設から2人のJOCVと4人の職員、フィリピンの水産大学から1人のJOCVと2人の先生、インドネシアの国立海面養殖施設から1人のSVと1人の職員の海外計11名と国内15名の参加となりました。
テーマは“魚類種苗生産技術”、アフリカナマズとパティンと呼ぶカワナマズを使って採卵から人工孵化までの基本技術を研修します、そのほかに、私の専門である遺伝子分析なども組み入れ、後半は参加機関からの発表や卸業者の見学も入れました。
会期は1週間、但しラオスは技術が遅れていることもあって希望により、1週間延長して経験を積むことになりました。

開催までの準備は、結局SVの私ひとりに負担がかかり大変な思いをしました。開催の正式通知がなかなか来ず、カウンターパートは年明けに転任になる始末です。日頃の仕事ぶりを見ていただけに、当初は日本人のスマートなやり方を見せてやろうと思っていましたが、それどころか足元から火がついて、最後は妻とフル回転で資料などを間に合わせました。しかしそんな苦労も研修がいざ始まると、目を見張る程にことが順調に運びました。何と言っても養殖施設で学ぶ大学院生と若手職員が作業チームを組んで見事に各実習を担当してくれたことが大きかったのです。
彼らの働きは海外ゲストの送迎や食事などの滞在中の生活の世話にも及びました。この若手中心の自主的活動に、海外からの参加者、特にJOCVが受けた感銘は大きく、JOCVのひとりは、帰国後すぐに感激の思いを綴って送ってくれた程です。

ここの養殖施設長は日本人、実はJOCVの先輩でもある瀬尾重治教授です。
瀬尾教授は、1981年にザンビアで技術指導を行い、その経験を踏まえて途上国で“魚飼い”を育てることに情熱を燃やしています。今回、彼の元で魚飼いが立派に育っている姿を見ることができました。

ラオスからの人が特に喜んで帰ってくれたように今回の研修はJICAの進める南南協力（注）の一環になりました。大学側も意欲を示しているので、今後の展開を期待しています。

（注）南南協力：途上国（援助卒業国を含む）が相互の連携を深めながら技術協力や経済協力を行いつつ、自立発展に向けて行う相互の協力のこと。

皆さんは障害者のお友達はいますか？

44

任期：2004.12~2006.12

久野 研二
JICA 専門家 / 障害者福祉
（NGO 連携）

国連推定では人口の 4 - 6% が障害者といわれています。
障害者といわれている人たちは、心身の障害以上に、学校に行ったり働いたりといった社会参加の機会が奪われていることがより大きな問題となっています。
従来から社会参加の制約は問題視されていましたが、その解決方法は、「リハビリテーション」といわれるような「障害者を訓練によって“健常者”に戻すことで“既存の社会に復帰をさせる”」という方法でした。しかし、実際には訓練によってある程度の機能回復はできるものの、全ての障害者が障害のまったくない“健常者”になれるわけではなく、結果、“健常者”になれない多くの障害者は社会から排除されたままとなってきました。
この現実を反映し、“障害者を変える”のではなく、全ての人にとって暮らし易いよう“社会を変える”といった考え方が先進国では主流になりつつあります。ユニバーサルデザインとかバリアフリーといった言葉もよく聞かれることでしょう。

さて、マレーシアの障害（者）事情はというと、マレーシアには日本のような障害者基本法も障害者年金もなく、教育機会も保障されていません。
私は 1991 年に協力隊で来て以来飛び飛びですが合計 8 年間ほどマレーシアで障害者福祉にかかわっていますが、障害者の厳しい状況はあまりよくなっているようには見えません。障害者支援の形態も、未だ施設に収容し保護するというものが多く、地域社会での自立と社会参加を支援するような取り組みは限られています。
もう一つの問題は社会の障壁です。道路、建物、公共交通機関、工業製品、どれをとっても障害者が自由に動き使える状況ではありません。
しかし、その中で LRT のプトラ線はバリアフリーになっているのはお気づきでしょうか？
この背景には 1994 年の障害者の大規模な抗議行動があります。最初の LRT であるスター線の開業時、運営会社は障害者の利用は危険なので「禁止する」という声明を出したのです。
まさに、世界の流れに逆行するようなことをしたわけですが、これに障害者団体が合同で反対行動をとり、マレーシアでは制限されているデモを行い、これがメディアにも大きく取り上げられ世論を勝ち取り、政府は次のプトラ線では障害者が利用できるようバリアフリーにすることを約束し実際にそうなりました。

このような状況を背景に、JICA は女性家族地域開発省・社会福祉局と協力し、障害者の社会参加を支援するため「障害者福祉プログラム強化のための能力向上計画プロジェクト」を 2005 年から 3 ヵ年の計画で実施しています。
このプロジェクトは、自立生活プログラムの導入、障害平等研修の指導者育成、雇用の促進、人的資源の育成の 4 つの活動からなっています。これらの活動では日本やイギリスから障害者本人に指導者としてきていただき、マレーシアの障害者自身が直接指導者となるような研修を主に実施しています。
日本からは自立生活センター長を務める重度の四肢麻痺の方に介助者を伴って来ていただきましたが、このように実際に重度の障害者本人が指導者となっている姿はマレーシアの政府機関にもまた障害者自身にも大きなインパクトを与えています。
JICA では障害分野の支援は一つの柱となっており、自立支援のための協力隊派遣や研修事業、また車椅子の製作技術者育成など様々な協力を行っています。
また車椅子バスケットボールの選手育成では自身も車椅子を操りパラリンピックにも 4 度出場している神保さんが協力隊員として派遣されています。

＊本稿では対比を強調させるために“健常者”という言葉を使いましたが、この言葉は障害者が不健全であるかのような誤解を生じさせるために、「非障害者」がより適切な表現となります。

自立生活指導者育成セミナーの様子

車椅子バスケ指導の神保隊員

家族

46

任期：2005.4~2007.4

鈴木 サヤカ
青年海外協力隊／環境教育
（サバ州森林局）

サバ州の東海岸、サンダカン市にある森林局のネイチャーセンターRainforest Discovery Centre（RDC）で環境教育に携わっています。センターでは、地元の児童生徒を対象にした自然に親しむアクティビティ、教員対象の環境教育研修、レンジャー対象の研修等を実施しています。
ここでは、仕事から離れて、「家族」との生活について紹介させていただきたいと思います。

現在、私は配属先近くに住む華人、客家の老夫婦の家にホームステイをしています。客家というのは、自然災害や戦乱を逃れて中国の内陸部から現在の広東省・広西省・福建省辺りに移り住んだ人々だと考えられています。18世紀末の太平天国の乱の後、乱に加わっていた客家の多くがボルネオ島へ逃れました。その後、20世紀初頭、農業拡大のために移民受け入れが奨励され、さらに多くの客家がボルネオ島に移住しました。私のホストファーザー、マザー（以下、アンクル、アンティ）の両親もその頃、香港から渡ってきて、この地で農業を営むようになったそうです。

配属当初から、仕事場近くでのホームステイを希望していました。交通手段の確保が難しいこと、1人暮らしに不安があること、そしてマレー語を上達させたいと思ったからです。ところが、カウンターパートが紹介してくれたのは華人の家庭。他にあてはなく、結局、その家にお世話になることになりました。アンクル、アンティ、家に出入りする彼らの兄弟や子ども、その家族、そして、隣の部屋を間借りしている下宿人が、私がここで得た家族です。
初めのうちは、彼らの話すマレー語が華人特有のアクセントと語彙を含むために、コミュニケーションに苦労しました。また、年配の人の中には、華人コミュニティーでのみ生活しているので、マレー語が苦手な人も少なくありません。同僚と喧嘩をしたある日、アンティに「今日はsakit hati（sakit＝痛い、hati＝肝臓、心→心が痛むほど悲しい／頭にきた）だった」と言ったことがありました。アンティは心配そうな顔で私に、「それは大変。薬は飲んだの？」と聞くのです。彼女は意味を取り間違えたのでした。

アンクルもアンティも、マレーシアで生まれました。ですが、彼らの生活には中国色が濃く出ます。アンティはお酒を発酵させる際、壺の上に必ず葉っぱと包丁を乗せます。悪い霊がお酒を酸っぱくするのを防ぐためだそうです。そういう習慣も残っているのです。
アンクルは中国が大好きです。貧困も犯罪もない国だと信じてやみません。先日、その中国から「絶対割れない急須」を買ってきました。アンクルは得意気に、私の前でその素焼きの急須を落として見せました。案の定、急須は木っ端微塵。だまされたことに初めて気づいたアンクルは、「高い買い物だったから、アンティには内緒にしてくれ」と言いました。

アンティが長期で家を留守にしている間、体の不自由なアンクルのお母さんを預かったこともありました。このおばあさんは、その昔、厳しい人と恐れられ、年老いた今も喜んで面倒をみる人はいないという話でした。でも、言葉によるコミュニケーションが不可能な彼女と私は、ニコニコする他になく、関係は至って良好でした。その彼女も今年の4月に亡くなりました。葬儀の日、アンティは私に「白いものを着るように」と言いました。友人には黒を基調にものを着るようにとアドバイスされたのに。葬儀に行ってみて、分かりました。おばあさんの血を引く人は、白いものを着ていたのです。自分が家族の一員として受け入れられていることを知りました。

外国人である私や、客家とはいえ血縁ではない下宿人を、まるで娘や息子のように受け入れようとするこの「家族」と生活する中で、私は改めて家族の大切さを感じています。おばあさんと私がそうであったように、私達は他人同士だからこそうまくいっている節がないわけでありません。本当の家族だったら、照れだとかいろいろな感情が邪魔するところ、他人だからこそ相手に優しくいられるし、言いたいことも言ってしまえるのだと思います。けれど、その中で親が子を、子が親を、兄弟が兄弟を、本当はどう考え、実はどれだけ大切に思っているかが、ストレートに伝わってきます。そして、改めて、家族の有り難さが分かるのです。日本に帰ったら、以前より素直に自分の家族を大切にできる、そんな気がしています。

アンクルと

ガイドウォーク

父の日

フェスピック大会に向けて

46

任期：2005.4~2007.4

荒井 弘子
シニア海外ボランティア / 障害者陸上
（マレーシアパラリンピック（障害者スポーツ）協会）

私は、マレーシアパラリンピック協会で障害者陸上競技のコーチとして活動しています。のんびりしたマレーシアですが、この業界はほとんど休日がないような生活です。というのは、今年11月25日から12月1日にかけて、マレーシアの首都クアラルンプールで障害者スポーツの祭典、フェスピックゲームス（アジア太平洋地域障害者スポーツ大会）が行われるためです。現在、大会の運営を担当するオフィスのスタッフも、それぞれの競技種目のコーチや選手たちも、この大会に向けて全力を尽くしています。

陸上競技は7月末から、センタートレーニング（合宿）にはいり、バンクシンパンナショナルのトラックで強化練習をしています。朝は、7時半から2時間半から3時間。夕方も3時間近く練習します。選手は、マレーシアの各州から選抜されたトップクラスの選手です。種目は、投擲種目、跳躍種目、短距離、中距離などと様々です。また、障害により出場するクラスが異なります。障害別では、視覚障害、脳性まひ、切断、車椅子、そして知的障害の選手もいます。選手は、目がよく見えなかったり、体のコントロールが難しかったり、体のバランスをとるのが難しかったりします。特殊な椅子を使用して、投擲種目に参加する選手もいます。また、レーサーと呼ばれている、スピードが出るレーシング用の車椅子で走る選手もいます。皆、毎日の練習の積み重ねの中で、自己の障害と向き合って、身体や精神をコントロールし、良い記録がでるようがんばっています。

私は、車椅子レースを主にコーチしています。日常はバンギの障害者リハビリテーションセンターで、ビギナーの指導にあたってきました。選手は上達し、練習が熱心になるにつれて、レーサー（レース用車椅子）も傷んできます。手作りのグローブも破れてしまい、手の皮がむけてしまいます。また、マレーシアには、10年近くこのレースを続けてきた選手もいますが、レーサーが古くなり、修理が難しく、活動できなくなる選手もおり、たいへん残念です。マレーシアには、リペアする技術や知識、用具が十分でないことを感じます。トップアスリートを育てることも大切ですが、このようなメンテナンスの用具や技術をサポートし、障害者スポーツの普及に当たることも大切であると感じます。

KLのマラソン大会ですが、障害のある方々もマラソンを楽しんでいます。私も昨年ハーフを走りましたが、自分のトレーニング不足を痛感。今年は10Kmにおさえて走ろうと思います。合宿ではこちらの習慣で夜の10時にお茶の時間があります。甘いお茶とお菓子。ウエイトオーバーをいかに克服するか！・・・・・

フェスピックゲームスですが、もちろん日本選手団も来場します。私はマレーシアチームのユニフォームですが、皆を応援したいです（メダルはマレーシアがいただきたいですが）。
只今、マレーシアチームに日本語を特訓中です。「TERIMA KASIH」「ありがとう」そして、各国の言葉で、笑顔のあふれるフェスピックゲームスになりますように。
応援よろしくお願いいたします。

障害者の高飛び競技の様子

障害者マラソン競技の様子（バンギ）

障害者マラソン競技の様子（プトラジャヤ）

障害があっても“できる”ことを伝えたい

47

任期：2006.8~2006.12

神保 康広
青年海外協力隊（短期）/車椅子バスケットコーチ
（車椅子バスケットボール連盟）

ラオスで活動するお二人の日本人とタイ遠征時に出逢って（筆者中央）

車椅子バスケットボールの指導という職種で、任地であるセランゴール州バンギを訪れたのは4月上旬のこと。本来の派遣先は車椅子バスケットボール連盟ですが、事務所等が存在しないため、実際には国立バンギ障害者リハビリテーションセンター（通称PLPP、国立の障害者職業訓練所）が活動場所。JICAが障害者の隊員を初めて送り出すと言うことで、いわば試験的にひと月の任期でした。その間、中進国マレーシアで任務の必要性とやり甲斐を感じ、この8月に再び戻ってきました。今回の任期は約5ヶ月ですが、毎日が新しい発見の連続であっという間です。

殆どの日本人がマレーシア人に対して感じることに「一生懸命さが欠ける」という点を挙げますが、バンギにいるバスケの選手達は少し違います。練習時間に遅れてくる選手もなく、10分前には各自で準備を済ませてウォーミングアップを開始します。また、時々日本人の方が見学に来られますが、彼らは一様に「車椅子バスケの選手は、珍しく一生懸命だし活気があって素晴らしい！」と褒めて下さいます。とは言え、日本人の感覚からすれば「集中力不足」、「覚えが悪い」という点では例に漏れず、なかなか思うように指導が進まないのも事実で、イライラすることは少なくありません。（苦笑）

現在、自分が指導しているチームには正式登録の選手で15名。また、マレーシア全体では約40名強の選手がいますが、各地に使用できる体育館や競技用の車椅子がない問題に加え、指導者がいず、指導カリキュラムがないという問題もあり、なかなか普及していかない状況です。さらに、障害者を取り巻く環境は厳しく、就職したり結婚できる人はごく僅かで、「職業訓練を終了して地元に帰っても、また元の生活に戻るだけ」となげく人も少なくありません。ある選手は「地元に帰るとバスケが出来なくなるので、何としてもバンギに留まりたい・・」と言います。彼らは常にそういう不安を抱えながら日々の生活を送っているのです。

今年の11月下旬にフェスピック大会（極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会）がKLで開催されます。そこで、少しでも良い成績を収めるために、国としても急遽障害者スポーツに力を注いでいるようです。JICAに派遣の依頼が寄せられているのもその要因が強く、現在も自分以外に車椅子レース・車椅子テニス・競泳などで隊員が要請されています。正直言えば、数ヶ月前から準備をしたところですぐに結果が出るようなものではありません。これはスポーツに限らず全てのジャンルで言えることですし、長年の積み重ねが力になることは言うまでもありません。ただ、この国際的な大会がマレーシアの障害者環境にとって、良い継起となることを期待してやみません。

JICAの隊員として派遣され、毎日の活動を通して自分は何が出来るのか？また、何かを残すことができるのか？と考えています。その中で、バスケの指導という本来の任務を全うする事はもちろんですが、それと同じくらい彼らに対して障害者も一人の人として“何でもできる”ことを伝えていきたい。学校で学ぶこと。職を持つこと。車を運転すること。そして、恋愛や結婚もできるし、家庭を持つこともできる。障害があっても健常者と呼ばれる人と同じように何でもできる。自分自身の経験からも、“諦めなければ絶対に変えていくことができる”ということを伝えたいです。

友人が教えてくれた言葉。「できない理由を並べて諦めるのではなく、できることを知って、どうしたら達成できるのか？を、考え行動すれば必ず道は開ける」。短い任期の間で、そのことを少しでも伝えられたら最高です。最後に、自身のWEBサイトでマレーシアでの体験を紹介していますので、興味がある方は是非ご覧になって下さい。

★神保康広オフィシャルサイト：
J's Page」http://js-page.jp/

バンギでの練習風景。週6日間で毎日5時間の練習に励んでいます。

先日参加してきたタイ遠征での試合風景。

チームの選手と集合写真。後方の左に立っている大きな人が、アンさんというカウンターパートです。

車いす製造技術移転と車いすバスケットボール普及

48

任期：2006.7~2007.2

麻生 学

シニア海外ボランティア / 障害者スポーツ大会運営・調整
（青年スポーツ省）

筆者（左）と上野講師

車いすバスケットボールの選手達と

国立バンギ障害者職業訓練・リハビリテーションセンターの車いす工場。
ここでは8名の障害者が車いす製造技術を学んでいます。設計製図、材料の加工、溶接、シートの縫製、組み付けに8名の生徒達が毎日汗を流しています。

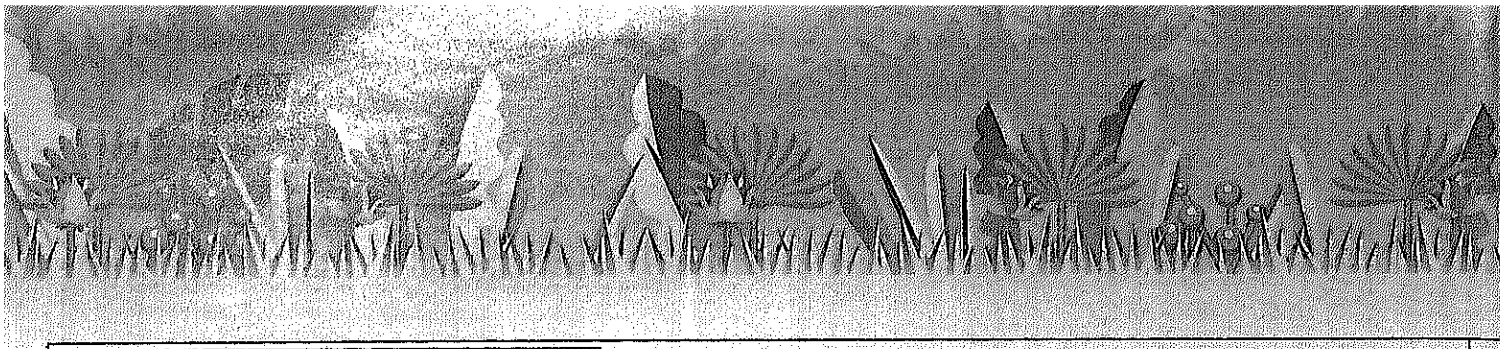
この事業を始めてから2年が経ちました。きっかけはフェスピック大会の開催でした。フェスピック大会はパラリンピックに次ぐ世界第2の規模の障害者スポーツ大会で、フェスピックという名前は、極東・南太平洋障害者スポーツ連盟の英語名（Far East and South Pacific Games for the Disabled）に由来し、現在ではフェスピック連盟が正式名称になっています。フェスピック連盟にはアジアと南太平洋の45カ国が加盟しています。1975年の第1回大会（大分県大分市および別府市開催）から2002年の韓国・釜山大会まで8回の大会を開催し、第9回大会が、今年11月25日から12月1日まで、クアラルンプールで開催されることになっています。

このマレーシアでのフェスピック大会開催にあたり、私たちはマレーシアの障害者福祉、障害者スポーツの振興に役立つ活動ができないか相談した結果、JICAの協力を得て、「東南アジアにおける車いす製造技術移転及び車いすバスケットボール普及」という企画を立ち上げることができました。これは2004～2006年の3カ年計画で、マレーシアにおいて車いすの製造を始めることと、車いすバスケットボールの普及を通し、フェスピック大会に参加するマレーシア人選手を育成し、ひいてはマレーシアの障害者福祉の推進に貢献しようというものでした。
結果として、マレーシアの車いすバスケットボールナショナルチームは、タイ、フィリピンに次ぐ実力を持つまでに成長しました。これまでシンガポールに勝つことさえできなかったチームが、レベルの高い国際試合に出場して上位の国に遜色のない戦いを挑むことができるようになりました。

車いす製造においては、これまで中国から輸入したものや、寄贈された中古品しか手に入りませんでしたが、地元で入手できる原材料を使って、マレーシアの障害者自身が車いすを製造できるようになりました。むろん、まだその品質は高くはなく、販売できるレベルには達してはいませんが、マレーシア国民の使う車いすは、バンギで供給できる道筋ができつつあります。
アジアで車いすを自国で製造しているのは、日本、韓国、中国、台湾など一握りの国で、他のほとんどの国では輸入品や中古品に頼っているのが現状です。太陽の家は「魚を贈るのではなく、魚の釣り方を教える」という方針でマレーシアにおいてこの活動を始めましたが、現在実施しているプロジェクトは2007年3月で終了します。私は個人的には、将来的に、車いすだけでなく福祉機器と呼ばれる様々な自助具、治具を供給し、スポーツにおいては重度の障害者が楽しむことのできるスポーツを紹介してマレーシアの障害者の自立と社会参加を支援してゆきたいと考えています。また、他の途上国においても同様に、車いす製造技術を含む福祉機器の製造技術移転やスポーツの普及を通して障害者の自立と社会参加に貢献できればと希望しています。

車いす製造の様子

車いす製造の様子

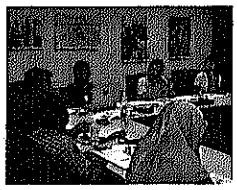


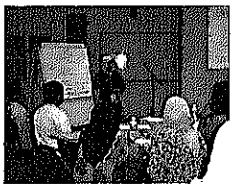
JICA マレーシア 50 年の歩み

1954 アジア協会設立

研修員受入事業開始

マレーシアからの研修員受入事業は 1956 年に始まり、2006 年度までの実績で、13,992 人ものマレーシア人が日本で研修を行いました。こうした帰国研修員は、省庁や役所などで要職につくなど、マレーシア国の発展のために貢献し、また、1988 年には、こうした帰国研修員のネットワーク強化を図るため、同窓会が結成され、今日まで、日本とマレーシアの友好のために、様々な活動が行われています。





■ **1957** 開発調査開始

マレーシア国独立～初代首相は、Tunku Abdul Rahman 氏

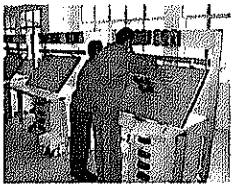
■ **1958** マレーシアに技術協力専門家派遣開始

■ **1962** 海外技術協力事業団（OTCA）設立

■ **1963** 海外移住事業団設立

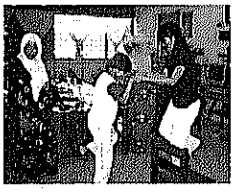
1964 機材供与事業開始

現在までのマレーシア国に対する機材供与額の総計は約 136 億円にのぼります（2006 年現在）。



1966 青年海外協力隊、マレーシアに派遣開始

1965 年にスタートした、青年海外協力隊事業は、1966 年にマレーシアをはじめ、ラオス、カンボディア、フィリピンの 4 カ国への派遣で開始されました。マレーシアには野菜、稲作、体育の分野で 5 人の隊員が最初に派遣されました。1966 年に 5 人で始まった協力隊事業は、2007 年 6 月末現在で、1185 人の派遣実績を誇ります。今まで一番多かった職種は「日本語教師」（138 人）で、その次が「養護」（72 人）となっています。また、2006 年度には、世界に先駆け、障害者の協力隊員（全盲、車いす使用者）も誕生しました。



1969 二カ国無償資金協力が開始

2006 年度実績で、対マレーシアへは、80.11 百万ドルが供与されました。

第 2 代目首相は、Tun Abdul Razak 氏

■ **1974** 国際協力事業団設立（海外技術協力事業団と海外移住事業団が統合）

1975 JICAマレーシア事務所開設

第三国研修開始

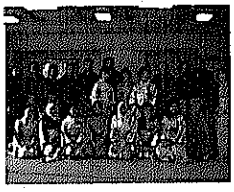
JICAでは、日本の技術協力を受けたある途上国が他の途上国から研修員を受け入れて、優れた開発経験や知識・技術の移転を行うことを目的として、1975年に第三国研修事業を開始しました。マレーシアでは、1983年に放送分野、及び金属加工の各々の分野で研修員を受け入れたのを皮切りに、これまで50コースを世界各国を対象として実施しています（2006年度現在）。近年、イスラム諸国への協力及び多民族国家における平和構築など、マレーシアならではの分野の研修が増加する傾向にあります。

第3代目首相はTun Hussein Onn氏

- **1978** 無償資金協力実施促進業務開始
- **1980** *マレーシア技術協力プログラム（MTCP: Malaysia Technical Cooperation Program）開始*
- **1981** *第4代目首相はTun Dr Mahathir Mohamed氏*
- **1982** 東方政策下で研修員受入
  ルックイーストポリシー（東方政策）開始

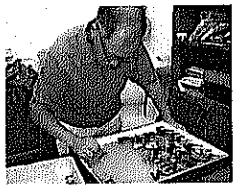
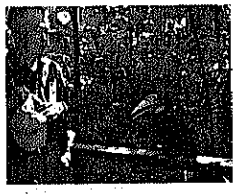
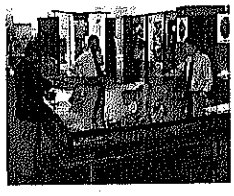
1984 青年招へい事業開始

1984年度に147名のマレーシア青年が日本を訪問してから、2006年度まで、計3227名の青年が日本で様々な分野で研修を行い、一般家庭へのホームステイプログラムを含む、交流事業を体験し、日本への友情と理解を深めることに貢献しました。こうした青年たちは、帰国後同窓会組織を結成し、今日まで、日マ友好のために様々な活動を行っています。



1990 シニア海外ボランティア事業開始

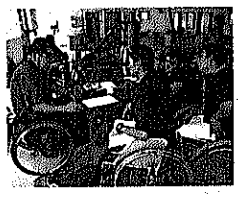
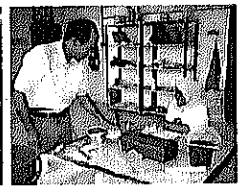
1991年、4名のシニア海外ボランティア（職種はそれぞれ「編み物」、「市場調査」、「日本語教師」）の派遣で始まった、マレーシアのシニア海外ボランティア事業は、以来、2007年6月現在まで、191名に上ります。多くの方が、現在も職業訓練校などで、マレーシア国の人材育成のため、尽力されています。

2003 国際協力事業団から、独立行政法人国際協力機構へ

JICA草の根技術協力事業開始

これまで、マレーシアには、地方自治体が提案する、「地域提案型」の案件が14件、国際協力の実績が比較的浅い市民団体を対象とした「支援型」の案件が1件、国際協力の実績が比較的豊富な市民団体を対象とした「パートナー型」の案件が1件実施され、主に、福祉や環境、防災など様々な分野で、マレーシアの方々と共に、草の根レベルで地道な活動が行われています。

第5代目首相はDatuk Seri Abdullah Ahmad Badawi氏

2007 青年招へい事業から青年研修事業へ変換

2007年度から、さらに研修内容をパワーアップして実施中です。2007年度の派遣予定人数は、5コース（行政、教育、IT、地域開発、経済の分野）で計80名となっています。

ACTIVITY MAP

Perak

- 9 浦山 美幸◉社会福祉局（養護）
- 26 鹿目 英記◉開発公社セラミック団地公共設備センター（陶器製造技術）
- 29 小松 雅憲◉連邦土地統合整備公団（自動車整備）
- 33 平井 麗子◉社会福祉局ベタニーホーム（青少年活動）

Kelantan

- 16 吉原 久雄◉クムブ農業開発公社（有機栽培）

Kedah

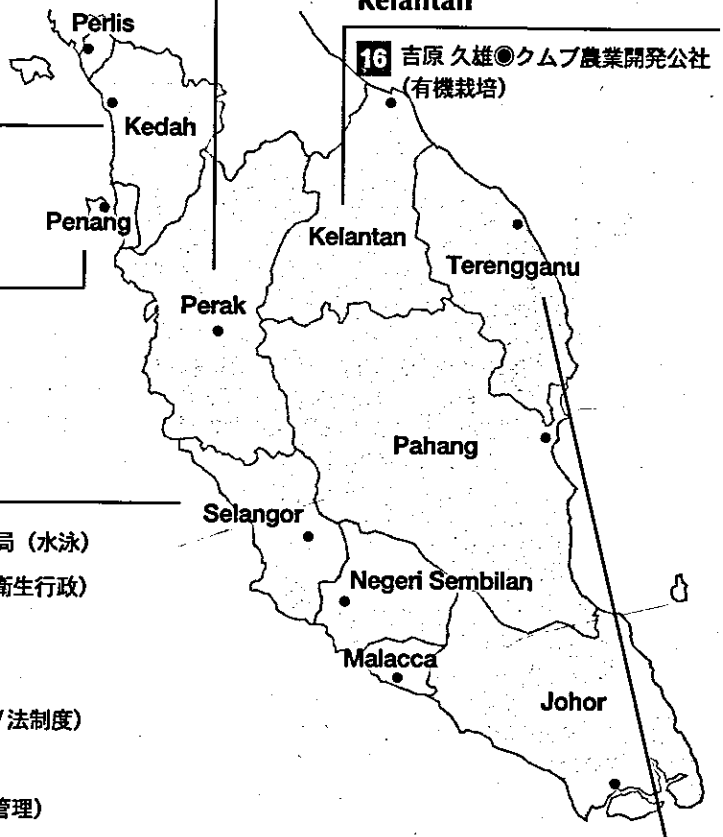
- 38 小林 康男◉州立産業技術開発センター（プラスチック成型）

Penang

- 49 辻川 英高◉日本・マレーシア技術学院
- 34 須山 勝彦◉クリム高等技術訓練センター（電子工学）

Selangor

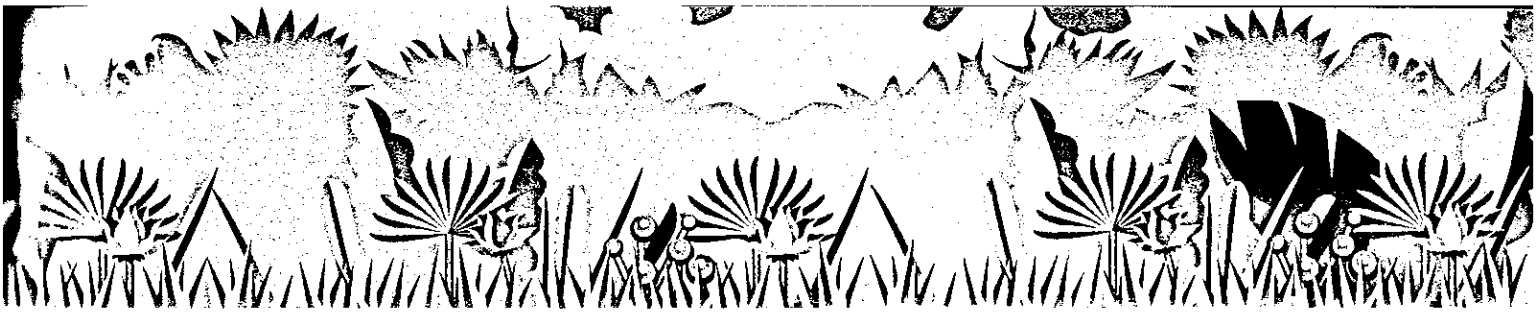
- 11 峰村 史世◉障害者スポーツ協会／森 智子◉社会福祉局（水泳）
- 22 塚本 郁夫◉保健省公衆衛生局食品品質管理課（食品衛生行政）
- 35 松野 裕◉国立労働安全衛生研究所
- 5 渡部 義太郎◉マルチメディア大学
- 6 佐々原 秀史◉農業省灌漑排水局（流域総合管理計画／法制度）
- 12 JICA マレーシア事務所◉住宅・地方政府省
- 13 佐藤 純一◉農業開発研究所畜産研究センター（家畜管理）
- 17 木村 秀夫◉マラ工科大学（国際産学連携）
- 23 安田 久美◉地方開発省社会開発局（幼稚園教諭）
- 28 米田 奈巳◉エネルギー・水・通信省（村落開発普及員）
- 30 笹森 栄◉地方・地域開発省社会開発局（早期幼児教育）
- 31 鈴木 敏雄◉農業省農業局農薬管理部（残留農薬分析）
- 37 羽鳥 達也◉農業省漁業開発公社（漁業地域開発）
- 40 土屋 康二◉海上法令執行庁（海上警備救難）
- 44 久野 研二◉ NGO 連携障害者福祉（障害者福祉・NGO 連携）
- 46 荒井 弘子◉パラリンピック協会（障害者陸上）
- 47 神保 康広◉車椅子バスケットボール連盟（車椅子バスケットコーチ）
- 48 麻生 学◉青年スポーツ省（障害者スポーツ大会運営・調整）



Terengganu

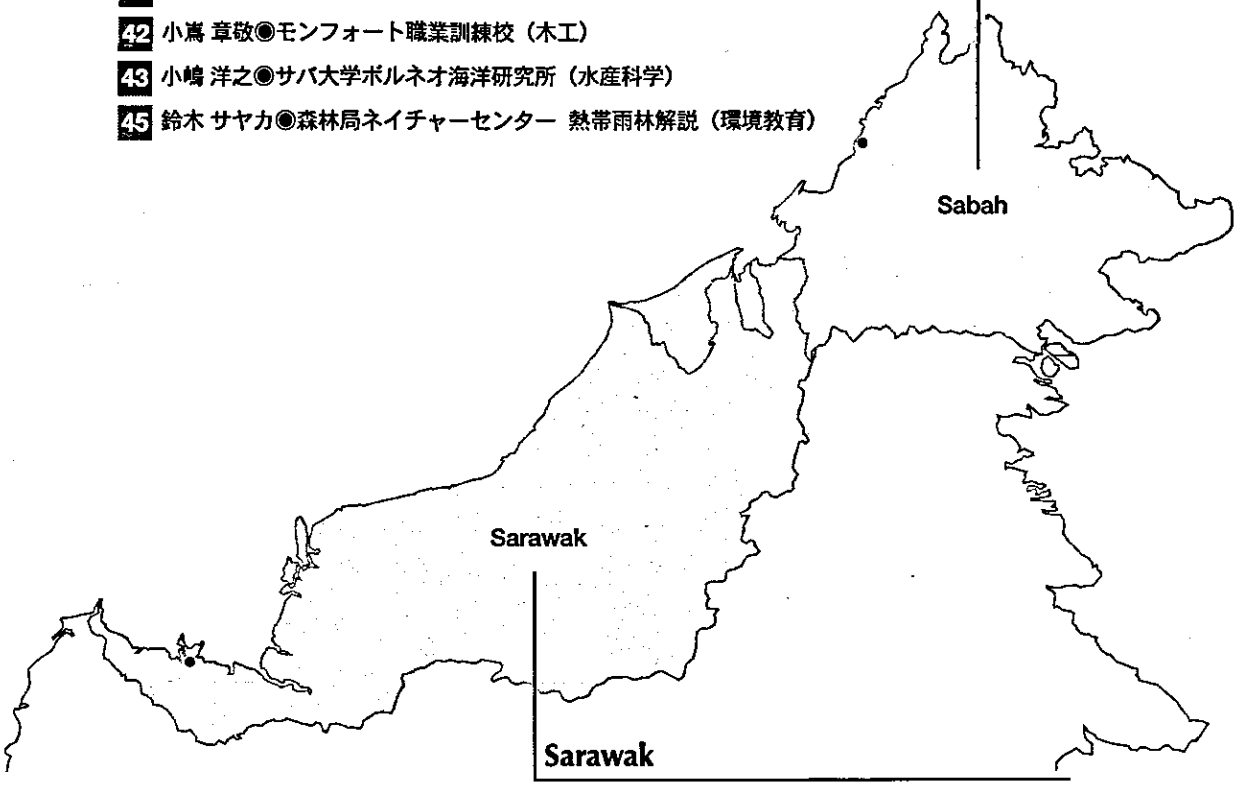
- 7 大内 直子◉社会福祉局／来間 寿史◉社会福祉局（養護）
- 8 宮田 俊彦◉農業省水産局（水産学校）（魚肉加工・品質管理）
- 10 屋代 英二◉農業局アジール研修センター（農産物加工）
- 18 伊藤 愛◉教育局特殊教育課スリ・プディ（養護）
- 41 小屋 慶弥◉トレンガヌ高等技術学院（ポリマーおよびプラスチック）

PENINSULAR MALAYSIA



Sabah

12 山本 純栄◉野生生物局（環境教育）
14 松本 文◉養護学校（スリ・ムンガシ・センター）（養護）
15 小谷 晃弘◉モンフォート職業訓練校（溶接）
22 中西 準治◉サバ開発公社（キナバル公園ラン保存センター）（ラン種苗組織栽培）
24 田仲 謙介◉野生生物局タビン野生生物保護区（生態調査）
25 山谷 裕美◉公共福祉サービス局（体育）
27 坂本 耕一◉公園局海洋公園管理事務所（生態調査）
32 平野 淳◉野生生物局（ダナウギラン）自然教育センター（環境教育）
39 岩田 周子◉公園局クロッカー山脈公園事務所（生態調査）
42 小嶌 章敬◉モンフォート職業訓練校（木工）
43 小嶋 洋之◉サバ大学ボルネオ海洋研究所（水産科学）
45 鈴木 サヤカ◉森林局ネイチャーセンター 熱帯雨林解説（環境教育）



Sarawak

19 佐藤 康文◉資源環境審議会（廃棄物処理）
20 大坪 和雄◉サラワク河川審議会（河川整備）
21 上杉 誠◉サラワク州森林局（生態調査）
35 水谷 晃◉森林局国立公園野生生物課（生態調査）
36 白井 健介◉障害者スポーツ協会（水泳）

■ 技術協力専門家
■ シニア海外ボランティア
■ 青年海外協力隊

EAST MALAYSIA

JICA

Japan International Cooperation Agency Malaysia Officre (JICAマレーシア事務所)

Suite 29.03, Level 29, Menara Citibank, 165, Jala Ampang, 50450 Kuala Lumpur, MALAYSIA

Tel: (60) 3-2166 8900 / Fax: (60) 3-2166 5900

URL: http://www.jica.org.my http://jicams-ngodesk.org